

「ぎゅっ」
ゆっ
っ
〜
輝
いた
た
一
日
〜

カッ君との出会いは私が図書館で働き始めた頃に遡る。初めて読み聞かせをした日、一番後ろにちょこんと座っていたのがカッ君だ。

初日に私が選んだのは『ぎゅっ』という絵本だ。動物の子供がお母さんに抱っこされる画面が次々と描かれる、人気の作品だ。三十人程の子供達を前に、先輩と交代で読み始めると、子供達が絵本の主人公と同じように驚き、悲しみ、喜ぶ反応が直に伝わってくる。

そんな中、口を一文字に結び、無表情な男の子が気に掛かった。後で先輩に聞き、その子の名前はカッ君で、四歳であること、発達障害を抱えていること、本が好きで毎回母親と一緒にお話会に参加していることを知った。

ある日、先輩がお休みで、急ぎょ独りでお話会を担当することになった。練習時間も無く、不安を抱えたまま本番の時間を迎えた。

案の定、読み始めて間もなく、子供たちがざわつき始めた。一人が席を立つと、つられて隣の子も立ち上がり、あっという間に歩き回る子供たちで部屋は混沌状態になった。「静かにしてね」と叫んではみるが、一向に収まる気配は無い。終には二人の男の子が喧嘩をし始め、一方の子が泣き出してしまったのだ。

私がどうして良いか気を揉んでいると、それまで身を固くしていたカッ君がすっと立ち上がった。そして、泣いている男の子に近づき、その身体を腕一杯に抱き締めたのだ。部屋は水を打ったように静まり返り、皆、驚いてカッ君をただ見つめていた。

「ぎゅっ」次の瞬間、カッ君が呟いた。すると泣いていた男の子が照れたようにはにかみ、周りの子供達からも笑顔がこぼれた。

「皆、こんな風にぎゅってされると嬉しいね。今から絵本の『ぎゅっ』を読むから聞いてね」私の声に子供達が絵本の前に集まってきた。カッ君のおかげで風向きが変わったのだ。

終わった後、カッ君に「ありがとうね」と言うと、口の端を上げて、微かにコクンと頷いた。カッ君の極上の笑顔はこの日一番輝いていた。